

## 生活科教育において「自然への畏敬」の学習をどのように構想するか

### —『内なる島』における父子の自然認識を参考に—

How To Construct Living Environment Studies Teaching Plan With Awe Of Nature  
-Focus On The Father And Child's Recognition Of Nature In *The Island Within*-

木村 学

KIMURA Manabu

文京学院大学

#### [要約]

我々が科学技術の恩恵を信ずる意識の根底には、自然への畏敬を暗黙裡に忘却する意識があるように思える。この点についてどのような解決策が考えられるのか、学校教育の観点からアプローチを試みたい。まずはじめに、人々が抱いていた自然への畏敬という概念について概観し、自然の持つ美しさと畏れの二面性について確認する。そして現代の人々がどのように畏敬の念を獲得できるのか、ネイチャーライティングの代表作『内なる島』における父子の自然認識に焦点をあて考察する。つぎに学校教育において、自然への畏敬の学習として、どのような教育目標が掲げられているのか、幼児教育、道徳教育の領域から考察したうえで、具体的な教育実践の展開として、生活科教育にその可能性を見出せないか考察を行う。

[キーワード] 生活科教育, 自然への畏敬, 『内なる島』

#### 1. はじめに

我々は、自然への畏敬の念を失ってしまっていないだろうか。2011年の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の放射能漏れ事故は、我々のこれまでのエネルギー政策の在り方を問い直す契機となった。核廃棄物の不確定な処理方法や、核燃料サイクルの実現性も定まっていないという事実を多くの人々が共有することになったわけであるが、我々は自然の循環系についてどのように考えればよいのであろうか。そうした中で行われた脱原発を争点とする衆議院議員選挙では、原発推進派の党が政権をとる結果となった。本稿で今後のエネルギー政策の是非を問う紙幅はないが、我々の科学技術の恩恵を信ずる意識の根底には、自然への畏敬を暗黙裡に忘却する意識があるように思えるのである。この点についてどのような解決策が考えられるのか、学校教育の観点からアプローチを試みたい。

まずはじめに、人々が抱いていた自然への

畏敬という概念について概観し、自然の持つ美しさと畏れの二面性について確認する。そして現代の人々がどのように畏敬の念を獲得できるのか、ネイチャーライティングの代表作『内なる島』における父子の自然認識に焦点をあて考察する。つぎに学校教育において、自然への畏敬の学習として、どのような教育目標が掲げられているのか、幼児教育、道徳教育の領域から考察したうえで、具体的な教育実践の展開として、生活科教育にその可能性を見出せないか考察を行うことにする。

#### 2. 自然の二面性と畏敬の念

日本人の自然観の特徴について、教育学者の小川は東日本大震災後に発表した論考の中で、以下のように述べている<sup>1)</sup>。

西欧文化の中でみられるヨーロッパ人の自然観と異なり、自然とつき合うという日本の自然観は、美しく恵み多いこの日本の風

土が実は一度地震等によって一挙に地獄に変化する可能性があるという二面性への認識に支えられていたのではないだろうか<sup>1</sup>。そしてそのことを日本人の知恵として伝承してきたからではないだろうか。そして日本人の無常観も一見、平穩にみえる日常も決してそうではない。つまり世は常ならず（無常）という想いを育ててきたのも、日本の風土と関係があると思うのである<sup>2</sup>。また桜を愛し、その満開の花の下で宴を催すのも、散りゆく時の来るのを予想するからではないだろうか。日本人の感性の中に「目には青葉、山ほととぎす、初鯉」と読み一つの句の中に多様な感覚がとぎすまされるのも、こうした自然の二面性への鋭い感性を育ててこざるをえなかったからではないだろうか<sup>3</sup>。（下線は筆者）

小川は、我々日本人の自然観の特徴として、元来、自然の美ともう一方にある負の側面の二面性を認識していたという（下線 1）。そうした自然環境の暮らしから、この世は移りゆくものであるという無常という文化も生まれたのであり（下線 2）。「目には青葉、山ほととぎす、初鯉」という俳句のように、季語を三つ並べて人々の生活と自然が繋がっていたことを示したり、自然の美の側面だけでなく、桜の散りゆくことを予測したり活火山のある不安定な土壌の上に暮らすことによって、研ぎ澄まされた感性だという（下線 3）。小川の示す自然の持つ二面性とは、日本語の畏敬という概念を具体的に示したものと考えられる。小川はさらにこの二面性に対する感性について、以下のように述べている<sup>2</sup>。

自然を支配しコントロールするという近代科学の提言よりも、自然と折り合いを付けるという日本人の自然観をここでもう一度見直すべきではないだろうか、それが日本という国に生きる人間の生き方なのではな

いだろうか。昔、伊勢神宮の境内の杉の巨木の中を歩きながら、神道にさほど深い宗教心をもっていない私が人を超越する自然の力に全身が包まれる思いをしたことを想起したが<sup>1</sup>、その後ギリシャのパルテノン神殿を訪れたときには、単に遺跡としてしか感知しなかった、私が日本人だからなのか、今も分からない<sup>2</sup>。（下線は筆者）

伊勢神宮境内の巨木の中を歩き、人を超越した自然の力を感じたという経験は、人間の時間尺度や空間的スケールでは把握しきれない巨木の存在に自然の力を実感したということであろう（下線 1）。このような感覚は、他国の遺跡を訪れた際には実感としてなかったという。そして、我々の自然に対する感性というものが、実はどのように身に付けられるものなのか、おぼろげなものなのであることを示している。

自然の持つ二面性とそれを感じずる感性としてのこの畏敬の念を、我々はどのようにして獲得していくのだろうか。特に子どもの場合、どのように畏敬の念を獲得していくのか、そのプロセスを実証することは難しいであろう。そこで、ネイチャーライティングの代表作の一つ『内なる島』における父子の自然認識を参考に考察を試みたい。

### 3. 『内なる島』における父子の自然認識

この著書を分析対象として選択した理由は、作者リチャード・ネルソンが地方都市で生まれ育ちながらも、生物学、人類学を学び、やがてエスキモーの自然観を人生のモデルとして生きた人物だからである。そして作品の中には、小学校五年生になるイーサンという息子がたびたび登場するため、現代の学校教育へのヒントを得られるのではないかと考えたためである。この著書は、ネルソンがアラスカ東部の海岸に家族で移り住んだ経験を基に、人間と自然の付き合い方についてまとめたノ

ンフィクションである。ネルソンはまず、人と場所の関係について以下のように述べている<sup>3)</sup>。

ある場所が特別な意味をもつのは、人がその場所にどんな気持ちを抱くかによるのであって、そこの地理条件や気候風土、自然の手なづけられ具合といったものによるのではない<sup>1)</sup>。(中略) 遠くを探索するのではなく、自分の住む場所を探索すること、すぐ目の前の物事にもっと深くかかわること、心のふるさと/本拠地にもっと根を張ること、そこに住むすべてを支えてくれる自然の共同体を守ること<sup>2)</sup> (下線は筆者)

ネルソンは、人と場所の関係について、特定の場所を持つことによって、ある場所が特別の意味になるという(下線1)。だからこそ、我々は場所とのつながりを求めて、遠くではない、足元を探索する必要があるという(下線2)。こうした自然探索の経験は、やがてネルソン自身と自然の一体感へとつながっていく<sup>4)</sup>。

この雄鹿は<島>がつくりあげたもの。湿原と、森と、山の草地と、琥珀色の池と、透明な沢<sup>1)</sup>。この雄鹿は灰色の空であり、雨であり、めったに射さない日光であり、冬のさなかに海辺で食べたケルブでもある。この雄鹿は、四、五年ぶんのあらゆる季節であり、秋の発情であり、体を寄せたしなやかな雄鹿たちと、その子鹿たちであり、月光と星々であり、風であり、いまぼくらのそばで波立つ海でもある。この雄鹿はぼくであり、ぼくらはたまたまこの島の岩塊の上で肉体どうしとして出会うことになったのだ<sup>2)</sup>。(下線は筆者)

狩猟中のネルソンが森の中で出会った雄鹿は、この場所の植物や水と同一なのであり(下

線1)、この雄鹿を捕獲して食するネルソン自身も雄鹿と同一の存在になるのである(下線2)。ここには、食物連鎖に基づく自然の循環系が、人間も含めて示されている。さらに以下の文章のように、著書全体を通して自然の負の側面に視点が置かれている特徴がある<sup>5)</sup>。

<島>の森や藪にはつねに、朽ちかけた折れ株、立ち枯れの木、骨ばかりになった灌木、そして何層にもなった腐植など、死の形跡があふれているのだが。ここに生きる何百万という生命たちがどれも、いつかかならず同じ最期を迎える以上、これほど自然なことはないのだろう。(下線は筆者)

こうした森の循環系の中では、自然の美しさの他に、あらゆるものの死が身近にあるのだという。この自然の持つ二面性に対する感覚が現代の我々には希薄になっているのではないだろうか。こうした経験を息子のイーサンは当たり前のように経験している。釣り上げた魚を食する場面を見てみよう<sup>6)</sup>。

イーサンとぼくはトウヒやツガより火のつきやすいベイ杉を探して流木の間を物色した。色と形と匂いでベイ杉を見分ける方法を教え、次に細かい焚きつけを割って、狩猟用ナイフで削り出した木屑の上に積み重ねるやり方を見せてやる<sup>1)</sup>。(中略) 二匹のメヌケは、単に美味しいとか、まったく自然のままの海辺で豪華な食事ができるとかいうのを超えている。自分たちの手で釣り上げたために、その食べ物の素姓、つまりこの島のこの場所で獲れたという出所の明らかなありがたみがあるのだ。さらに自分たちの手でさばいて料理したことにより、それがどのようにして口に入ったか経過がわかるし、糧となってくれた動物に対してきちんと敬意と心づかいを示したこともわかる<sup>2)</sup>。こうして自分で自分の身を養う責

任を引き受け、ぼくらに生命を与えてくれる動物たちとの絆を確認することには、えも言われぬ喜びがある。(下線は筆者)

父であるネルソンは、食事の為の火のおこし方を自らモデルを示し教えようとする。この場所の自然をどのように生かして自分の生活に取り入れるかを子どもに見て学ばせようとするのである(下線1)。そして、捕獲した物を実際に食べることによって、自分の生命を維持することと、自然を糧とする負の側面の両方に敬意を示す(下線2)。ここには、自然の二面性に目を向けて生きる父子の姿が描かれている。

ここまで見てきた通り、自然の二面性に目を向けて生きるプロセスは身体知として獲得されるものであり、特定の地域にある自然の中に人間を超越した歴史や自然の力を認めることと言える。ネルソン父子の経験を参考に、具体的な学習を構想するならば、①地域学習、②自己と地域の一体化、③自然の負の側面への視点、という3つの特徴を組み込むことが重要である。このことを学校教育の教科に置き換えてみると、理科的な自然学習の要素だけでなく、社会的な地域学習の要素も含めて合科的に指導する生活科に類似していると言える。

#### 4. 幼児教育における自然への畏敬の扱い

前述の『内なる島』から導いた自然の二面性に目を向けるプロセスは、アラスカ東部というワイルダネスをフィールドとしており、日本の学校教育に置き換えることに齟齬を感じるかもしれない。しかし、人と自然の付き合い方、大人と子どもの関係性という点では、大いに参考になると考えられる。

それでは学校教育において畏敬という概念は、どのように扱われているのか確認していく。まず、幼稚園教育要領を基に、幼児教育の領域から見てみよう<sup>7)</sup>。

身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。(下線は筆者)

幼稚園教育要領には、畏敬の念という言葉が表記されており、身の回りの自然現象や動植物に対する気持ちとして養われることという目標が掲げられている。幼稚園教育要領解説によれば、こうした気持ちは、「共に遊んだり、世話をしたり、驚きをもって見つめたりするといった様々な身近な動植物などのかかわりを通して」身に付くものだという<sup>8)</sup>。

元来、幼児の自然認識の傾向としては、周りの事物に対して自分と同じように生命があるというアニミズム的思考を持っており、こうした思考は生命を大切にしたり、いたわろうとする気持ちにつながりやすいと考えられる。しかし、やがて発達段階が上がるにつれて、小学校以降になると、幼児のアニミズム的思考は薄れていくと考えられる。

#### 5. 道徳教育における自然への畏敬の扱い

小学校教育では、道徳教育の領域において、畏敬の念という言葉が表記されている。道徳教育の目標として、どのように扱われているのか見てみよう<sup>9)</sup>。

人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の

保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。(下線は筆者)

道徳教育の目標として、筆頭に人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念とが併記されている。学習指導要領解説によれば、人間尊重の精神が生命に対する畏敬の念に根ざすことによって、より深まりと広がりをもってとらえられるからであるという<sup>10)</sup>。生命に対する畏敬の念を土台として、国際社会の平和や環境保全に貢献するような人間形成が行われるということである。

ここで学習指導要領解説を基に定義付けを行うとすれば、「生命に対する畏敬の念」とは、「人間の存在そのものあるいは生命そのものの意味を深く問うときに求められる基本的精神であり、生命のかけがえのなさに気付き、生命あるものを慈しみ、恐れ、敬い、尊ぶこと」と言える<sup>11)</sup>。

慈しむということは、自分以外の他者や他の生命に対して愛を与えることと言える。次に畏れるということは、自分を超越した存在を認めることである。そして敬い、尊ぶことは、他の生命に対して礼を尽くしたり大切に扱うことを意味するものである。つまり、我々人間が生命として一番上の存在だと考えるのではなく、他の生命の存在を認め、さらに人間を超越した存在を認めることである。

このように人間形成のうえで、生命に対する畏敬の念を養うことは、学校教育の中で最も基底にある重要な概念と位置付けられている。このように示されている道徳教育の目標は、「各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動などの指導を通じて行う道徳教育も、道徳教育の要としての道徳の時間の指導も、常にこの目標を目指して行われる」という<sup>12)</sup>。

こうした概念の獲得には、具体的な体験が欠かせない。そこで教科の中で、特に体験活

動を重視している生活科について見てみたい。

## 6. 生活科教育における課題

生活科の教育目標には、「畏敬の念」という表記はされていないが、教育目標について見てみよう<sup>13)</sup>。

具体的な活動や体験を通して<sup>1)</sup>、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち<sup>2)</sup>、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに<sup>3)</sup>、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ<sup>4)</sup>、自立への基礎を養う<sup>5)</sup>。(下線は筆者)

まず生活科は、他教科と異なり体験活動を非常に重視した教科と言える(下線1)。それは幼児教育が遊びの指導を中心とした教育であることと連続して、低学年の児童の場合、活動を通して身体的に環境に働きかける学習が重要であることを意味するためである。次に、生活科で扱う学習対象は、身近な人々、社会、自然となっており、ここでは対象との相互のかかわりが重要となっている(下線2)。さらに、もう一つ学習対象として自分自身が含まれていることが特徴的である(下線3)。このように周囲の環境と自分との相互関係のかかわりの中に、生活に必要な習慣や技能を身に付けることをねらいとしている(下線4)。そして最終的な生活科の教育目標は、自分自身の自立となっている(下線5)。生活科に限らず学校教育の目標は、児童一人ひとりの自立や人間形成にあるはずだが、生活科では自分自身の学習や生活、精神的な自立が強調されている。

前述の『内なる島』における父子の自然認識の部分では、自然の二面性に目を向けるプロセスとして、①地域学習、②自己と地域の一体化、③自然の負の側面への視点、という3つの特徴を挙げておいた。これらの特徴は、生活科の教育目標とどのような関連性がある

のか確認しておこう<sup>14)</sup>。

自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。(下線は筆者)

まず、生活科の学習内容の一つに地域の生活がある。子どもの環境認識は、家庭から始まり生活する地域へと広がっていくものである。生活科の最終的な目標は、自分自身の自立や成長であり、地域について学習することを通して自分のかかわりや存在を学習することになるであろう。次に地域の生活は、四季の変化や季節によって変容していくものである<sup>15)</sup>。

身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりなどして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに気付き、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできるようにする。(下線は筆者)

『内なる島』のような自然豊かな特異な場所とは異なる、都市や都市郊外においても、各地域の行事や文化は、季節の移り変わりや自然環境に大きく依存するものである。そうした気付きは、自分たちの生活が自然によって生かされている存在だということへの気付きにつながっていく。

このように生活科教育では、地域の生活や自然という学習対象を、児童自身のかかわりを含めて学習することに特徴がある。学習指導要領にも、「身近な自然」という言葉が何度も表記されているように、生活科教育では地域をフィールドとした学習が構想されなければならない。

## 7. 今後の課題と展望

本稿では、畏敬の念という概念を、子どもはどのように獲得できるのか考察してきた。日本の学校教育において、幼児教育から小学校教育に至るまで、教育目標の大きな柱として明記されており、特に小学校教育においては、体験的な学習を重視する生活科教育にその展開可能性を見出すことができた。

一方、学校教育のカリキュラムの中では、そもそも限界があるのではないかという指摘もあるだろう。例えば、長期間のセカンドスクールや自然学校の子どもキャンプ、山村留学などのような体験学習も有効であろう。しかし、上述のような体験活動に参加できるのは一部の子どもに限られる。全ての子どもたちにどうやったら、畏敬の念を獲得するような活動を提供できるのか、学習指導要領が理念的なものであり、学校現場の現状も多忙な状態であるという限界を認めつつも、学校教育の中に学習を構想しなければならないのである。

## 引用文献

- 1) 小川博久 (2011) 東日本大震災に改めて本学会の意義を想う 野外文化教育第9号 22-33 頁
- 2) 同上 22-33 頁
- 3) Richard Nelson (1989) THE ISLAND WITHIN リチャード・ネルソン (1999) 内なる島 星川淳訳 めるくまーる 12-13 頁
- 4) 同上 57 頁
- 5) 同上 300 頁
- 6) 同上 183 頁
- 7) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説 117 頁
- 8) 同上 117 頁
- 9) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説道徳編 23 頁
- 10) 同上 24 頁
- 11) 同上 23-27 頁
- 12) 同上 22 頁
- 13) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説生活編 10 頁
- 14) 同上 31 頁
- 15) 同上 36 頁